

私の娘

三上 祝子



二年半のアメリカ生活を終えて帰国してまもなく、夜になると娘の由香がシクシク泣きだしたものでした。

「ママ、いつアメリカへ帰るの、パパのお仕事はいつ終わるの。」と尋ねる由香へ、パパのお仕事は日本の大学の先生でアメリカへは研究に行っていたこと、これからはず

っと日本で暮していくことを話すと、由香は悲しそうな顔をしてアメリカからも帰ったお人形たちをしつかりだきしめ、「あー、帰りたい。」とつぶやきながらねむり

につくのでした。私と由香はしばらくの間こんな夜をくり返しました。アメリカでは一度も日本へ帰りたいとは言わなかったのに。そう、由香のアメリカはとても楽しかったのです。

一九七六年七月、夫と五才の息子、三才の由香の一家四人でアメリカの中西部インディアナ州の田舎町サウスベンドに着いた頃は、建国二百年祭のにぎわいの最中で

人々は美しい笑顔をふりまき素朴な喜びをみちていました。サウスベンドは静かな大学町で大きなメイプルの木々に囲まれ町の中をセントジョー川がゆったりとカーブして流れていました。大学の近くに借りたアパートの裏の原っぱには、リスやかえるがはねまわり夕方には大きなホテルが舞うのでした。これからの滞在の不安をかかえた親の気持とは裏腹に子供たちは、次第に開放的になっていったのでした。ニューヨークから父親の夏季講義のアルバイトについて来た一家や、長い休みをもてあまし気味の土地の人たちから、小さなゲストの子供たちは、ビューティフルと話しかけられだきしめられて片言の英語も話せぬうちから遊びに入れてもらったのでした。

九月になり上の息子は近所の小学校のキンダーガーデンへ行き、由香は同じアパートに住む二、三人の子供たちと一諸にプレイスクールに入れることにしました。スクールといっても、そこはただの民家でドイツで幼稚園の先生をしていた経験のあるビスバスさんという五十才位の方がたった一人の先生でした。自宅の広い居間と芝

生の庭を使っていました。クラスは三才児10人の二クラスで午前と午後に分けていました。居間には、ピアノもオルガンもなく子供たちの机とイスの他おもちゃやクレヨンのおいてある小さなロッカーがあるだけでした。朝の二十分位は個人レッスンで順番の子を一人ずつビスバスさんのひざにのせハサミの使い方や工作の仕方などといねいに教えるのです。他の子供たちはテーブルを囲みパズルやカードで遊びながら作業中の友を心配そうに見守るといった具合でした。その後、みんな芝生で遊んだり、ビスバスさんの手拍子で歌ったり、お話を聞いたりしながら夏の暑い日は、チェリーエイドというあまずっぱい赤い飲み物をいただいてその三時間が終るのでした。由香はここで始めて家や母親から離れて集団の中の生活を覚え、物の名前や自分の意志の伝え方を経験しはじめたのでした。

由香の良き友だちアネとアクセル兄妹の母レギーナはすっかりものスイス人で、ちょうど私たちと同じようにドイツ人の夫の仕事で一家でこの町へやって来たので



▲ビスパスさんの庭で

すが、私と気持の通じ合うところがあり、すっかりうちとけ毎日のように行き来していました。レギーナは帰宅後の午後のプログラムを作っていました。アナたちの希望もあり私と由香もプログラムのメンバーになりました。時には由香の兄も加わりました。三時になるときまってレギーナたちは、ドアをノックする代りに、「ノック、ノック」と歌うように言いながら我家をおとづれて行動開始です。夏は大学のキャンパスにある湖でひとしきり水遊びをし、湖のそばに咲いているペパーミントの花をつみ、いつまでも沈まない夕日を背にアパートに帰りつく頃は、体中ペパーミントのかおりでいっぱいでした。秋は動物園通い。小さな動物園はトラが一番の見せ物で、うさぎやにわとり、馬とまるで家畜園のようでしたが、町中のメーブルが真黄色になり急に寒さがやって来てクローズドの看板が出る日まで通ったのでした。音もなくふり出した雪が何日か積りアパートのスノーカークがこしらえた雪道を通ってしか行き来することが出来なくなると室内のプログラムに変わりました。曜日を決めて

お互いの部屋で子供たちと遊ばせることにしたのです。レギーナの日には子供たちと訪ねてみると、子供部屋は楽しく遊べるように工夫され、テーブルの上には、夏に合ったペーパーミントで作ったレギーナ特製のお茶がポットに入れて用意されていました。子供たちは大喜びで夏の思い出のお茶をおかわりしました。レギーナは、外出出来ない冬は、毛糸で大きなかべ掛けを作ったり、むづかしいケーキをじっくり作ったり、夏につんでおいた花のドライフラワーにしておいたもので花輪を作ったりしていました。子供たちはレゴや人形遊びにあきるとレギーナにせがんで毛糸のかべ掛けを教えてもらったりするのでした。室内遊びは、時にケンカになったりもしましたが、病氣と休日以外はかかさず続いたのでした。春が来て町中のライラックやもくれんの花が咲きみだれ、子供たちが自転車をのりまわせるまで由香がレギーナから教わったことは、長い冬を一人であるいは友だちと室内で過すスイス流の方法だったようです。再び夏を迎えた頃、私たちは夫の仕事でシカゴへ引越すことにな

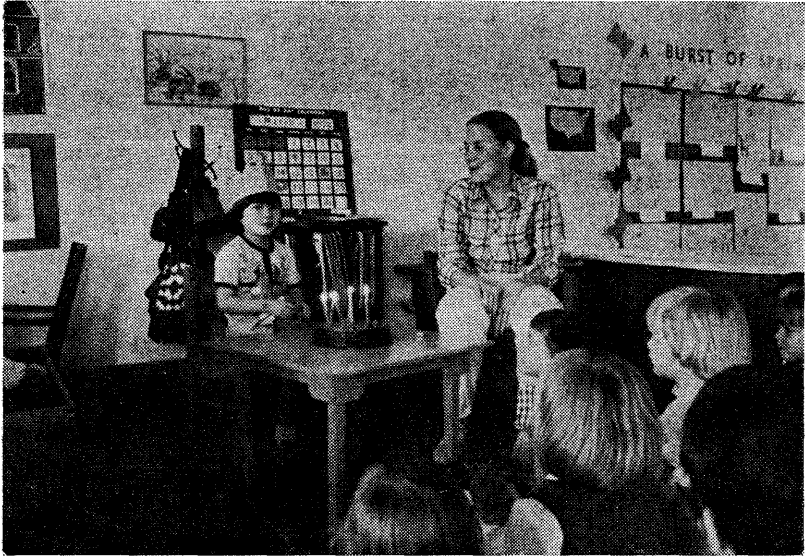
りました。アネたちやプレイスクールの友だちは、これから遊び時なのにと別れを悲しくやがりました。由香もさびしそうでした。

シカゴは、サウスベンドから車で二時間ほど離れていましたが、月に一度は用事で訪ねていたので全く知らない所ではありませんでした。美しいミシガン湖にそった大都会です。私たちの住居となったシカゴ大の構内にある職員アパートの周囲は通り一本向うがいゆる黒人街でした。大学のガードマンとポリスカーが一日中巡回し、アパートの遊び場にもガードマンが立つというものしさでしたが、アパートの子供たちは、なれっこになっていて、アパートの裏庭でキャッチボールをしたり、遊び場でママゴトをしたりして、上の子も由香もすぐ友だちになれたのでした。九月になり兄は小学校へ由香は近くの教会のナーサリースクールに入れました。赤いレンガ造りの教会でシカゴ大学の落ちついた建物や古い造りの民家と共に美しい街並みを作っていました。午前二クラス、午後一クラスありましたが、由香は

一時一三時までの午後のクラスでした。二十人ほどの子供に先生が二人で、日本の幼稚園の教室を三つ合わせたような広い部屋は三つのコーナーを作っていました。一つは絵をかくコーナー。真ん中はピアノと、テーブルとイスが置いてあり、お話を聞いたり、うたったり、パーティを開くコーナー、もう一つはママゴトコーナーでした。子供たちは好きなコーナーで一時間ほど遊びその後、真ん中のコーナーで工作したり、歌を覚えたりして帰るのでした。時々はクッキーを作ったり、教会のバスで図書館へ行って本を借りたり、月に一度礼拝堂で聞かれるおばあさまたちのピアノコンサートを一諸に聞いたりするのでした。きれいに着飾ったおばあさまたちが大好きな由香は、帰宅するとかならずこの日のことを報告するのでした。二人の先生はいつも話し合いながらとてもよい奮闘気でチームワークもしっかりしていました。たまにどちらかが休む日は、父兄の中から幼稚園の先生の経験のある人が頼まれるのでした。先生の一人のミセスリッツは、オランダ人でした、絵の好きな由香をいつもほめて

くださるので由香はリッツが好きでした。もう一人のミスレーンは、学校を出てまもない元気の良いアメリカ人で、いたずらっ子には恐れられていました。彼女の絵本の読み聞かせはすばらしく、こわい話の時は泣きだす子もいました。由香は、おやゆび姫やシンデレラのお話が好きで、「ワンスナボナタイム」とレーンの口まねで私に聞かせてくれるのでした。アメリカの歌もたくさん覚えて口ずさみながら帰宅するのでした。

シカゴでも同じアパートのドイツ人一家と親しくなり、彼らの一人息子で三才のアンドレと姉弟のように遊ぶのでした。アンドレの母親のイングリットは彫金の勉強をしており台所のすみを作業場にしていました。由香はアンドレと遊びながら作業中のイングリットの手もとをのぞきこんで、時には作り方を教えてもらったりしながら手仕事の楽しさを覚えるのでした。ナースリックスールのお友だちと遊びの約束をしたり、アパートの同い年のクリステーンと仲良しになり由香のシカゴでの生活が広がっていった頃、三度目の夏を越し九月の半ば私た



▲シカゴのナーサリイ 由香のバースデイ

ちは帰国しました。

見なれた風景、住みなれた家、心待ちにしていた祖母や友人たち、みんななつかしいことばかりでした。しかし、出発の時の記憶のある兄とは違って、由香にとっては始めてみるにひとしいことだったようです。まもなく兄は小学校へ行き、由香は近くの幼稚園の年長組に入りました。由香は言葉がわからないとまどい、いらだつのでした。アメリカでは家族とはいっても日本語で話していたのでさほど言葉に不自由はないと思い、そのうちなれると気になかったのですが、すっかり自信をなくしたようで、冒頭に書いた由香のくり言がつづいたのです。朝、いやがる由香の手をひいて幼稚園につれて行き様子をみていると、確かに由香の覚えている言葉と使い方は数が少なかったのです。先生も扱いに困っておられたようでした。由香が今まで学んだ生活様式は、ここでは間違いとされることが多かったし、学校就学の前に知的作業の多いほとんど遊ぶ空間のない生活は、きゅうくつでたまらなかったのでしょう。由香の思いがけ

ない拒否的生活に私もやりきれないようなある日、由香は、自分の意志で自分のしたいことを見つけたのでした。テレビに、行ってみたい絵の学校のようなすがうつつたという。電話番号を書きうつしたから連絡してほしいというのでした。翌日、絵の学校を訪ねてみると、広瀬川に面した公園の向いの白いビルの一室で、五、六人の子供たちが絵をかいていました、進められるままにかきだした由香には、はっとするような解放感がありました。この日から、週一回の絵の学校で、由香は言葉にとらわれる心配もなく、せかされることもなく、明るく声をかけて時には遊んでくれる先生たちとうちとけていったのでした。小学校に入ってもまだちぐはぐなしっくりしない毎日だったのでしよう。学校が終り家の近くまで来るとがまんできず、「ワーン、ワーン。」と大声で泣きながら帰って来るのでした。しかし土曜日絵の教室の日はごきげんで喜色満面でした、こうして由香は自分の領域を見いだすことによって落着いていったのでした。今は学校の生活にもなれました。友だちとくっ

たたくなく笑いこぼる姿や、ひまをみつけては何時間も手仕事を続ける由香に私は、レギーナやイングリットの姿をみるような気がするのです。

